

古高取を伝える会会報

直方の高取焼



古高取

目次

古高取紹介	2
窯元紹介	3
古高取の広場	3
会のあゆみ	4
活動の記録	5
なんでも掲示板	6

「古高取の知識の学習」

先日のバスツアーで、肥前名護屋城跡を訪ねました。太閤秀吉の野望のために築かれた、その城域は約十七万平方メートルにも及ぶ総石垣作りの大城郭で、その規模に圧倒されました。朝鮮に出兵した西国の武将たちは、競って朝鮮陶工を連れ帰り、窯を開かせます。当時は、焼物ひとつと城をとりかえるという、異常な時代で、当時の世相を学ぶことも、本会の4本柱の一つの「古高取の知識の学習」にとって大切なことではないでしょうか。

利休、織部、遠州と時の権力者とのつながりも学びたいものです。

古田織部が天下の名品とたたえた「破袋」という古伊賀の水指は、写真で見る限り、どう見ても失敗作に見えます。

隅田知明

筆者は本会の会報の中に連載で「内ヶ磯窯出土の茶入れ」について説明を付した。

会員諸氏に、「茶入れとは」と質問すると、次のように答えが返ってくるでしょう。

抹茶あいは碾茶を入れる手のひらに載るほどの大きさの陶器製の壺である、お茶の道具には一連の動きの中で名詞化されたものばかり、すなわち「水を指し」↓「水指」、「水を翻し」↓「水翻」の



『君台観左右帳記』の「抹茶壺之事」掲載の茶入見取り図

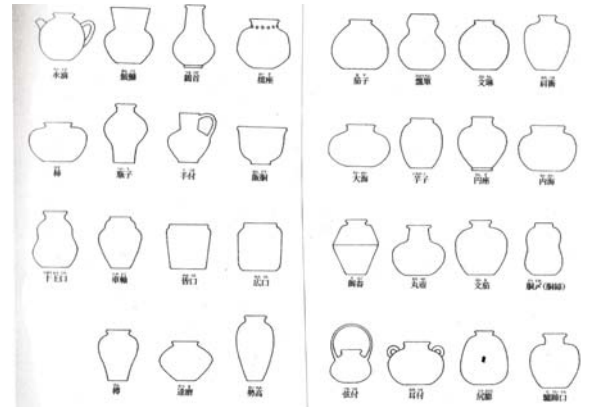
ごとくである。「茶を入れ」↓「茶入」も、この用法に従って道具名として総称され定着したものとと思われる。

本来は、『山上宗二記』^(註1)によると狭義に解して大海^(註2)のような大きな形状の容器に限定されていた。歴史上正しい総称として抹茶壺があるが、桃山時代にすでに茶会記でみる限り使われなくなって、「小壺」あるいは単に「壺」としていた。また「茶入」には、『日葡辞書』^(註3)では、別に漆器製の茶を入れる容器という意味もあるし、一般には茶を入れる容器全般をさしている。

広義的に「茶入」となったのは近代で大正期^(註4)からであったと考えられる。

「抹茶壺」の呼称は、室町後期の『君台観左右帳記』^(註5)に図入りで、茄子・驢蹄・大肩衝・小肩衝・大海・丸壺・弦壺(あるいは水滴)・驢蹄口の水滴・手瓶・餌籠(釜)・飯銅・瓢箪・播座(あるいは播茶)・尊形・勢至・湯桶・常陸帯・棗・鶴頸の十九種が登場し、古くから唐物の形状分類には関心が集まっていた。

佗茶が盛んとなった天正年間(一五七三〜九二)の後半には、唐物の「肩衝」タイプが圧倒的に



茶入れの形

多く用いられ、これに呼応したかのように「肩衝」タイプを写した瀬戸茶入や、やがては日本各地の窯業地が茶入生産(国焼茶入)を開始して需要に応じた。

高取焼も一貫して現在に至るまで、製作は継続されている。本来水挽き轆轤形成の厚さ約二ミリメートル前後ほどの薄手の陶器のため粘り気のある微細な陶土と優れた形成技術を要し、産地はおのずから限定されている。唐物を第一等品とする価値が桃山時代に確定している、この写しが高取・上野等の国焼茶入と称するもので、江戸初期・前期に確定し銘をうたれ名物^(註6)として確立しているもので、

茶道具(茶入等)は将軍家や大名家への献上品としての価値化が添加されていた。

註1 『山上宗二記』桃山前半の茶道具の流

行を記録した名物記。執筆者は千利休の弟子山上宗二で別名『茶器名物集』とも

言。茶入中最も口づくりが大きく大型を呈するもの。

註2 『日葡辞書』日本語をポルトガル語で説明した辞書。一六〇三年(慶長八)本編、翌年、補遺出版。日本イエズス会宣教師編。長崎学林刊。収載語数三万二二三語。当時の口語を中心に広範な日本語を採集・収録している。

註3 『大正名器鑑』としてまとめられたもので、編著者は高橋箒庵による。名物茶入・茶碗ならびに編者の選定にかかる茶入・茶碗の図録。九編十三冊。器物の実物大の写真図版を揚げ名称由来。大正十年十二月に初冊を刊行し昭和初年に完成した。

註4 足利将軍に仕える阿弥衆が編纂した。唐絵の画人録。座敷荘殿(飾り次第)、唐物という三部構成からなる伝書、桃山時代にはほとんど使われない唐物名義紹介に終始する。

註5 茶器のいわゆる名物には三種ある。千利休以前、殊に東山時代のものに「大名物」といい、利休時代のものを単に「名物」といい降って小堀遠州の選定したものを「中興名物」という。

参考文献

- 新訂陶磁用語辞典 雄山閣 一九七四
- 原色茶道大辞典 淡交社 二〇〇六
- 日本史広辞典 山川出版社 一九九九
- 茶道古辞典全集 9 淡交社 一九五九

窯元紹介

陶房 青空間 細田 延俊

当陶房は、直方市感田の地に工房を開いておよそ十三年になります。現在は手狭になってきたこともあり、拠点を飯塚市八木山に置いており、感田は展示、陶芸教室を中心にしています。豊かな自然に囲まれながら、日々、探求の毎日です。ぜひ皆さまにも当陶房なりの作品を楽しんでいただけたらと思います。

八木山、感田とも陶芸(体験)教室も開催していますので、お気軽にお越しください。

細田さんは、公務員の頃通った陶芸教室(高取焼)がきっかけとなり、陶芸の世界に足を踏み入れ



たこのことでした。作陶を追求するうちに天目や炭化焼成に惹かれ、現在はそれらを中心に活動をしているそうです。

最後に、「高取は直方の誇れる宝だと思っています。多くの人に知ってもらえれば良い。」とおっしゃっていました。

陶房 青空間 細田 延俊

〒八二〇一〇〇四七
飯塚市八木山二二五〇一
電話 〇九四八二二二一三三九
〒八二二一〇〇〇一
直方市感田二八六二一四
電話 〇九〇一五二九三六〇八八

高取の広場

永満寺むいちよる

高取 宗恵

「・・・この寺有し故村名をも永満寺と云」。筑前国続風土記拾遺さて、この場面は長谷川法世の「博多っ子純情」に出てくる一場面である。長編漫画で毎回博多言葉を取り入れて展開する。その中に「ええまんじゅむく」の場面である。当地では、「永満寺むいちよる」と言う。意味は見当違いとか同調せん者とか、ずれている・変わり者等というらしいが、永満寺に住む者としてはちよつとつらい思いである。

この言葉のいわれは、私の知る限り四つある。一つは、この漫画のように永満寺という寺の山門の向きが違うことから。二つ目は、直方藩四代藩主長清公が多賀神社に寄進した鳥居の向きの話。三つ目は、その藩主が参勤の江戸での火事の話。四つ目は、福岡城のいづれかの門の修復に永満寺から出向した大工の話等々である。

ちなみに三十年ほど前、当地から宗像へ嫁いだ女性が地域の井



戸端会議で当地出身とは知らずに「又あなたが永満寺向いたような話をしよる」との言葉が出てきて、冷や汗をかいたとの話を聞いた。そうすると、この筑前国においてかなり広まっていたのであろう。

しかし何故、この田舎から遠く博多言葉となって伝えられたのであろうか。直方藩が四代で廃藩となり福岡本藩に家臣団が吸収され、言葉も一緒に移転したのか。よく分からない。

今では、もう人の口の端に上ることは無くなった。

わたしと高取焼

永富 セツ子

今年で八年目を迎える「古高取を伝える会」は、さまざまな催事を重ねてきました。

特に内ヶ磯窯開窯四百年の記念行事は記憶に新しいところで一大イベントでした。

発掘出土品展、講演会の開催など高取焼の歴史や魅力を大いにアピールすることができたのではない

いででしょうか。

またその際に、内ヶ磯窯跡から発掘調査によって膨大な量の陶片が出土し、九州歴史資料館に三千三百箱ほどが保管され、また直方市にも四百箱が保管されていたことを知りとてもおどろかされました。

我が会が今最もやらなくてはならないことは、高取焼の発祥の地である直方に古高取資料館を設置することです。そのためには具体的な提案を行政に投げ掛けていくことです。行政と連携し必ず実現したいものです。

そして我が会の活動方針のひとつ



に次世代へ繋げるとあります。市内の十一校の小学六年生対象焼物

教室を七年間開催して子供たちが古高取を誇れるような活動をしてきました。そしていまでは子供たちの作った作品のお茶碗で、市内全校の六年生がお茶会を経験して日本文化に触れて卒業していくまでになりました。焼物教室のスタッフとしてうれしい限りです。

わたしは本会に関ってきて多くのすばらしい方々や著名な講師の方々と出会うことができたことは「古高取を伝える会」のメンバーとして活動してこられたことの賜物です。

これからも地道ながら熱く活動の輪に入っていきたいと思えます。

会のあゆみ

高取焼開窯四百年祭から十年が経過しました。本会の活動をあらためて振り返り、今後十年、二十年とつなげていきたいと思えます。

会の名称の由来

古高取とは、宅間窯―内ヶ磯窯



―山田窯（八山が蟄居）の時代に焼かれたものの総称であり、茶の湯の世界では広く愛されています。

直方市には、発祥の宅間窯や貴重な発掘・調査が行われた内ヶ磯窯があり、その歴史や文化は貴重な宝です。

ちなみに、山田窯の後、八山が蟄居をとかれて開いた白旗窯では遠州高取として名を高め明治廃藩になるまで続きました。

直方が高取焼発祥の地であることから、会では発会当初から四本柱を立てて活動を続けています。

活動の四本柱

- 一、活動拠点の構築
- 二、古高取の知識の学習
- 三、古高取の魅力の発信
- 四、次世代への継承（焼物教室
部会、市内の小学校で六年生
対象に焼物教室を実施。いま
までに約五千二百個を作陶。
その他、地域対象の焼物教室）

また、総会時には、さまざまな
記念講演も行いました。次のとお
りです。

平成二十年 講師…副島邦弘氏
「文化遺産としての古高取の継承」



平成二十一年 講師…小山亘氏

「織部好みと内ヶ磯窯開窯」

平成二十二年 講師…副島邦弘氏

「宗湛と織部」

平成二十三年 講師…永富政英氏

「町づくり推進と高取焼」

平成二十四年 講師…高取八仙氏

「小石原陶工として生きる」

平成二十五年 講師…渡久兵衛氏

「上野焼陶工として生きる」

平成二十六年 講師…亀井味楽氏

「高取焼の魅力。〜陶工として
生きる」

平成二十七年 講師…高取八山氏

「高取焼宗家十三代。〜陶工と
して生きる」

更に学習部会の研修講座（年間
五回と現地研修）のまとめとして
実施した講演は次のとおりです。

平成二十年 講師…田村悟氏

「内ヶ磯窯の出土品について」

平成二十一年 講師…日隈精二氏

「日本の美意識と精神性」

〜茶陶の根本にあるもの〜

平成二十二年 講師…副島邦弘氏

「神屋宗湛の遺跡を訪ねて歩く」

平成二十三年 講師…西谷正氏

「最近の考古学事情」

〜古代から近世まで〜

平成二十四年 講師…宮崎克則氏

「遠賀川絵図・福岡城下町絵」

平成二十五年 講師…中野等氏

「文祿・慶長の役」

〜豊臣政権の大陸侵攻〜

平成二十六年 講師…中野等氏

「黒田官兵衛と六端城」

平成二十七年 講師…松岡克則氏

「筑前における茶陶」

講演していただきました皆様、
参加していただきました皆様、本
当にありがとうございます。
これからも、どうぞ宜しくお願
い致します。

活動の記録

●子供焼物教室

平成二十七年十月〜二十八年三月
場所…直方市内の小学校

今年も、「マイ茶碗でお茶会」が
各小学校で始まりました。

六年生の子供達と素晴らしい出
来映えの茶碗に出会えるのが私た
ちの楽しみです。

短時間のお茶会ですが、和のお



もてなしの空間を設え、子供達を
迎えています。

何事も自ら身体で体験し感じ考
えることを大切にしてマイ茶碗を
いたわり、おもてなしに使ってく
れるようになればと思います。

”継続は力なり“という言葉が
あります。

これからも皆様の協力を得て、
卒業茶会が続きますように私自身
も茶道の勉強に励みたいと思いま
す。

一碗のお茶を通じておもてなし
の心が伝わり皆から笑みがこぼれ
る一日を毎回過ごしております。

田中紀子

●唐津窯元探訪バスツアー
 〈平成二十八年三月二十六日(土)〉
 集合：直方中央公民館
 参加：二十名

花見を兼ねたバスツアーでしたが、二分咲きで残念でしたが、唐津の飯洞甕窯を訪ね、昼食後、名護屋城跡を見学して、楽しい一日を過ごしました。

飯洞甕窯は周囲を岩山に囲まれた、自然豊かな場所にあり、梶原夫妻の親切なもてなしに感動しました。

名護屋城跡は、初めて訪れた人が大半で、その規模に圧倒されて帰ってきました。



なんでも掲示板

●日本民藝館を訪ねて

〈平成二十七年九月十三日(日)〉

場所：日本民藝館
 (東京都目黒区駒場四・三三三)

長年の夢であった、日本民藝館を訪れる機会がありました。閑静な住宅地を先輩と歩きながら、周辺全体が、不思議な空間を醸し出し、ときめく心を抑えながら館へ。パンフレットに、美の観点、美の本質云々・・・そんな言葉なんて必要なし。只々美しい。黒く照輝く光沢にうつとり。「手仕事の芸術ここにあり」を体感しました。



美しく、長持ちする本物のモノに囲まれた、幸せなひとときを満喫しました。

柴田ムツ子

●金剛山もととり協議会だより

〈平成二十八年二月十九日(金)〉

場所：金剛山もととり広場

数年ぶりの大雪に見舞われた今年の冬ですが、寒さに負けず、あじさいも、木々も、小さな芽をつけています。

ヤギ達も若草萌える春を首を長くして待っています。

二月十九日(金) 植樹祭を終えました。

山桜、ソメイヨシノ、もみじ、あじさい、山一面に咲く日も遠くない状況になりつつあります。

私達は十年後、二十年後の里山の姿を描きながら、里山の再生に取り組んでいます。

自然の営みから元気をもらっています。

今年は、六月十一日(土)〜三十日(木)の間「あじさい祭り」を実施します。

皆さん、遊びに来てください。

末松登志子



●のおがたチューリップフェア
 〈平成二十八年三月二十六日(土)〉

〓四月三日(日)〓

場所：遠賀川リバーサイドパーク

”市民で植える。市民で咲かせるチューリップ“をテーマに開催される「のおがたチューリップフェア」、今回で二十回目を迎えました。

「古高取を伝える会」も初めて参加しました。

昨年の晩秋に球根を植えつけ、花壇の中の草取りも三月十九日(土)に実施しました。

是非、足を運んでください。

末松登志子



● 素敵なプレゼントを頂きました
 〈平成二十八年二月二十一日(月)〉
 場所：下境小学校

下境小学校六年生の子供たちから、古高取焼き物教室のお礼にと手作りの感謝状とたくさん笑顔とありがとうのプレゼントです。
 一緒に給食を頂きながら、楽しい会話、笑顔のおもてなしを受け、



心温まるひと時でした。子供たちが直方の宝である古高取を学習することによって、郷土愛が生まれ、お茶会を体験して、これからの人生でなにか一つでも自信を持ってくれたらと、大きな希望と健やかな成長を願っています。
 日頃より「ひとづくりはまちづくり」と、諸先輩から学び、地域貢献への思いと直方愛を持って、多々活動をしています。
 今回、そのご褒美を早々に頂きました。
 焼物教室スタッフ 橋本晴美

6年 1組 名前 木下 綾乃

とうけい教室で焼物を初めて作ってみて、とても楽しかったです。うっわが分厚かったり、形が少しななめになっていたりしたら、先生方がアドバイスをくれたり、いっしょに作ってくれたりしたので、きれいに作ることができました。とうけい教室でふだん、知ることのできないことを知れてよかったです。例えば、焼物を焼くと15%小さくなることなどが知れました。焼物の作り方を私たちに教えてくれてありがとうございました。

下境小学校の六年生から子供焼物教室の感想文をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。次ページへ続く。



下境小学校の六年生から子供焼物教室の感想文をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。前ページからの続き。

6年 1組 名前 立花 沙希

今日はとうげいを教えに来てくれてありがとうございました。
 とうげいしたのは初めてどうまくできるか不安だったけど
 気付いたところなどを優しくいねいにわかりやすく教えて
 くれたのでうまくつくることができました。とうげいはむずかし
 かったけど楽しく集中してできたのでよかったです。たかとり焼きは
 昔からあるものだというのを初めて知ったので「昔からあったんだ」と
 思いました。今日は本当に思い出になりました。またきかいが
 あったらつくりたいなと思いました。どういつふうになるか
 楽しみにしています。今日は本当にありがとうございました。

6年 1組 名前 古川 かいと

今日はぼくたちのために古高取焼の体験をさせて
 もらいありがとうございました。
 ぼくが高取焼を作ると難しかったところは
 少しずついねいにするところが難しかったです。
 体験して感じたことは、せめて昔から高取焼が
 続いているので伝えていきあとの世代にも
 残していきたいです。ぼくは、焼き牛物がやきおわ
 たり家でも使ってみようと思います。

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報
 など募集しています。事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

最近になって、急に春めいて
 来たような気がします。この季
 節は、桜やチューリップが私達
 を迎えてくれます。頑張ろう、
 と言う気になります。

今回の記事の中で「高取焼開
 窯四百年祭から十年」を振り返
 っています。もうすぐ総会も開
 催され、次の十年に向けて新た
 なスタートをきります。

ますます活動を充実させねば
 と思います。

今後ともどうぞ宜しくお願い
 致します。

「古高取通信」会報・NO 22

〈発行〉

古高取を伝える会

〈発行日〉

平成二十八年四月十日

〈現在の会員数〉

正会員 五十四名(五十四戸)
 賛助会員 十八名(二十七戸)
 団体 一団体(二戸)

〈マイ茶碗の数〉

五千二百七十一個

〈事務局〉

〒八二二一〇〇二六
 福岡県直方市津田町七十四
 TEL 〇九四九(三三)一三二一